

| | | |
|--------|----|----|
| 冊數 | 書號 | 部門 |
| 一 五 | 四 | 三 |

校
外
久

近江輿地志畧

十二

| | | |
|----|---|---|
| 日 | 月 | 年 |
| 68 | 一 | 三 |
| 日 | 月 | 年 |
| 68 | 一 | 三 |
| 日 | 月 | 年 |

近江輿地志略卷之四十三

膳所 寒川辰清轉

栗本郡第五

法會社

是長束村行昌村也舊有五社上馬村也

片岡村

昌平村也舊有五社上馬村也

朝大明神社

行昌村也舊有五社上馬村也

浦之洋

行昌村也舊有五社上馬村也

二天大明神社

行昌村也舊有五社上馬村也

一車鬼社

行昌村也舊有五社上馬村也

邑丘原山多昌西諸師開奉之

一 畏念ち 口村より仰せたまふ至文十二年卯年建之

開奉沙沙

地藏寺 口村より

一夜供様

口村より田の事へり 伊佐代少神乃
神像にてひびきをもすと

下ち村

日暮村のゆき野村 諸村より
詫問也 ひちねこをかす詫問、是前鶴麻の便坐
れ行はば歎へんとくに地も大仰哉」と行ともせ

くも今もかずとも

一 佐都口村より佛事もふ

一

一 津田山口村 佐藤ちわの詫問

一 先湯寺

はぬ山口村より佛事もふ

一 五加村

やぢれのわたりひと野間の引取と

一 圓徳寺

しわせりてあむと野じ野もよ

一 圓正ち 口村より

一 雨足ち 口村より

一 芦浦村

あらわのちみゆき日が紀安閏天皇二

年五月五年引申置近江國芦浦屯会三十九地界を

以持多く御引のとも村はけのも食持ぬかす

一 佐代少神社

芦浦村より社也所渭ニム

主事格高行者十津即多氣外り主事多氣主事持
至南社の事大般由時代社の事よりにいに移命を承
方守清師道陽坊の園梨省菟山徒千人を詔賜
御く國人多角あるを内ニ有るには多氣代の主傳と
御御是も地東野分南も主傳とて主傳とて
清清主傳の達りはるを傳也主傳とて主傳とて
九月壬午一月庚午十二日卯時城を押す事
之一束の中おほはれ候ば以御路高より而爾能る
計懸さむはるを主傳とて主傳とて主傳とて
下主傳を主傳とて主傳とて

一昌義沙 壬午八月廿九佛事主事多氣主傳の内
男多氣の主事
一石生も 口打主事多氣主事
一光持も 口打主事多氣主事
一金主も 口打主事多氣主事

一齋國も 口打主事多氣主事の門主新加佛事主事
功高寺僧主事多氣主事多氣主事多氣主事
あわち齋國も主事多氣主事多氣主事

一吉遠也 口打主事多氣主事多氣主事

一 銀筆も

口才ももち瓦立石と千シ石七七七も人暮

出玉事園子集傳里も

神恩萬万も勿々十四

而して娘の事の経緯もはばは御代もと命はり
又御水の源引はるが下に御水　常憲院殿源
初のアラカマリシテモアハシハシシテモアハシ
往來御もとよりのシテモアハシシテモアハシ
良善也

一

太白你　門前銀も多々聞ト薦すすむ事多しよ

所うちけんちあゆもくふくにすす事事叶ひたゞ修代

一

身中の社山根内、移き仰む所行徳也望請者を幸甚

連と御て殿がりおまけ御手を赤く正氣と厚めし奉
とあじ五年島元と爲くたまふとあゆに及しとよと葉
を落とすは時と葉落とすまほと彼生南と葉生の極も
と御ふ葉すと芦浦の文祖とと日出とと山那
葉を落すとからゆうと仰ぐを事と國の姓とて事終す
是慶元ヒ室主乃事統と南國と云ひて一ノ山也
歴多官主守と勤めすとあはれと色ほほと勤めす
事と不入日中紀左事役と御手入と承てと之と
苦勞事行持金と老主事と仰ぐ事ありたまと奉れ
川端と云ふ事南の事とひだり川と城主也十號達

もとをもすのなかに、森の橋本川の太子川傍ニモアリ
山窓林木に到りて、其風氣とて、入出、移不食人
進み、まきをす。而て、樹周ニニ将をあらど、其の
流と向りの多岐を以、また、山内國佐川郡へ

長束村

丹名村の東に山村を

さよも

七条村の向う佛支を

西方も

日村にうり口を

阿彌也

日村にうり湯を下げる仕方を村う一ヶ所

豪國院

日村にうり天正律を

阿彌也

日村にうり地をいも

西方も

日村にうり口を

天神社

日村にうり信云所を立つをと申す

所を立つ大園

考究と西すうり神体あり、毛髮を多々

京事のうちも、この所の考究を云つて、と達し奉れ

土佐源と天神と稱せ、蓋太園は、多めに考究

をうけた

大老を立つ

日村にうり四半間四方にけり、車と之

立つ、門圓を立つ

到處を廣め、長束大老大輔は

地を住候せ、大老の御事をせむる者を至りて、大園

考究の立すりの一人たゞは、を人萬りを了絶

三坊を立つ

日村にうり、住吉山の三坊田主翁集

せむ佛堂の多事の跡を因を傷つ跡ハテの大老をもて

一 何原村 十里村より東に有村

一 野村 行者村の西より野村延びる至元日矣

庄乃寺次より北の北より野村延びる至元日矣

一 安良大山神社 聖村有り金光二月也

一 沂志村 日村にあり一向宗東布教の事之

一 大山寺 口村にあり渾名本山野村阿彌陀の事之

一 四方寺 口村にあり傳名もあらず

一 東光寺 日村にあり口村

一 三毛寺 日村にあり少々也

一 五毛寺 日村にあり少々也

一 平井村

聖村の東より平井村と平井加賀野及び平井七
家屋もうちの七から平井七と云ふと大坂美娘の土岐ゆめ

石子

一 小平井村 平井村の東より村々

一 靈仙村 小平井村の西より村々お行被子と有りた

れよき辰中せ以歟と云ふ也坊門地主は自ら
晏仙村と云ふ

一 大字傍生並跡

奥仙村にあり今民ありまども

二 七里村

一 はらゆる陽

経て豊島村にあり皆即ひのそよなれ

利

一 民風の生むる處
雪見寺村より少紀生を傳へ石後支

方々

北中山少彦村 ほ村のまゝ

法あらば
北中山少彦村より久爾年中蓬の上人
の園寺一向宗も承うる事無く

正八幡社 ほ村のまゝ

古高多村 中中山少彦村の北より

大將軍社

古高多村より西月二十日育二十九日

摸

二町村

古高多村の東より三村たゞは村峰を望む
所在すと民家建てたゞのや

教願寺

二町村より一向宗西も承うる所之
村中移村の東より

金川村

市河金村のまゝ

巻村

市河巻村のまゝ

太寶天主社

徳村より所多麻モキモモ文天

皇の大慶八年中慶作
至る所ゆくても天色と有る

午既天定之事ハ社家に進ゆて之より降伏れ松木

今より太夫大社へ巡り奉事の席より石舟を祭る所
を左額なり太室天王を八文字を奉事し横門内村
左店の体神ともて隠拂たりお行徳古川社の傍より
至て北齋より属し事も總御成年十四村丸社とよ
ゆ世を仰二十三村の事と多幸を每年四月卯子より
了社便と西田吉内卿とよを監定の日吉内卿、入
く幽社の所坐と仰せふ人との間半再三なれぞ被簾
不吉と申すと不妙矣

一一 西林寺 繊村より一向宗西林寺の事也
如意寺 ロ村より一向宗如意寺の事也

一 布眼寺 日村には太室山佛服もと号はせん之本
まつらは院寺一人いす本侍は者は佛の眼也もとまつら
村へ出候せんとす。今まつらの傍へ着て加持利
きとあくとを左手に佛服の名もとし土佐云山もと
太室と申する。又以て太室天王の神あるべしと云う

一 花園三昧 日村にあり是花村及山村の花園也土佐云
村東の三昧とすと音をもつて今ハナリ因と云ひて
る。花園は源開寺の花園の一つなり。品村の花
堂極樂寺とそり花園の圓覺寺は御本山也。花佐亦云
花石山花基は別名と云ひて花佐山は義光造の塔をもつて

生れも死にゆく事も又はた石高梵字の如きども

はくとくの仕事はうつすうりの毫の刺す如否か

燭庵堂村 修村の少司以示村々村々燭庵の寺門

卷之二

始覺王氏一曰少始覺王氏子有始覺王氏孫長定

子之少也。余嘗與其母游。見其子。方四五歲。目不識丁。而口能誦詩。人問其母。曰。此子生而知之也。

金石村

中華書局影印
今本詩集

浮舟村
今高林のあつらふ村へ

清都行はる
湯きみれのあくわひ

郭大師範

多知事師延慶年也 延慶達之子也

自らに王室の権力とも一毫も無く、實を取る事の能はぬ

内ヒサニテヨリモ大ナハ
ノシテシテ入ミタハ御清神事也

人情事也。舊有句云：「人情事也。」

口能免于不善之物也。但其地名，不离神
鬼者，不可知也。此亦當遠去。

五
一
九

一 常喜と常蓮ち にせきひり町ふ京令とえちのまち

永保七年は源和の國奉

一 薩倉山景りち にけりりけふ京令とえちのまち

長二年薩倉山景りちのまちの速毛之時村ハ薩倉の地
雄北條源氏の源利景と景清ともつて弘治六年

七月廿五年

一 美福ち にむくひ津ちふみた海老門のまち

天文六年閑菴公徳奉

一 美光ち

にむくひ津ちふみた海老門のまちの京令

一 隆河林ふ上人の閑菴公徳奉

一 西福ち にせきひり町ふ京令とえちのまち

嘉慶開基壽頤

一 古城地

賤朝右近之令在住のゆきよ

一 美代村

翁刻打の南とすけ

一 宝島ち

翁刻打と一白玉とあらわち事源之言

宝永二年二月十八日裡唯萬閑菴奉

一 追村ち おをれ村とあらわしと珍翁刻打とば村

直東より浮舟門の前と薩倉津と刻打と唐風の酒

源と事とちを門のまち

一天神社

辻村の町に所多萬の御子の御子

圓翁ち

口付てうりてあふあぢのものと書く

正善ち

口付てうりてあふあぢのものと書く

薦仰ち

口付てうりてあふあぢのものと書く

利を廻比叡山を離山なり。欲を以て一山砍伐せば
そ是れは和専中もの薦仰不離山の事。本初
ニセキ丹浦をあすれども現出あり。自薦仰の像
が眼剣を今の薦仰も之れ焉り。次第に行ひ。竟
ひままで。丑ノ時、自ら出でて年を離さむ者人甚
き。薦仰慕々が多む。わち薦仰をめぐれ居る。

お詫び行つて。すて地を遠ざけぬ人の心。其まにて
和専は徳の少く。あらゆる年。奉褐仰。——般
依を違ふ。法事も立度。年一周原り。後再び同道の
城へ細門出。のち。かづかく。城後改て。あ
迎え。お詫び行つて。行つて。又引く。行つて。
河内郡の人。薦仰因縁と。おもひ。かづかく。大傳と
奪拂。——行つて。行つて。行つて。行つて。行つて。
薦仰の川。——行つて。行つて。行つて。行つて。行つて。
年九月。奉事の。——既次を。ほんと。角引。大傳と

口付てうりてあふあぢのものと書く

ちをむけり。辻村のあまみぬけとヤオハ宅多打

も角引の説むりあり

も庭大屋中。も庭日暮多金多めナムモ王うき草

半額請とよふ

後悔す

口せれま済かふ

西えち

口材多きとらふ

高野莊

経営高村林村、山野村梅村あり

アリ材も有り材村と材村とよふ

新軒撰集

画房

多々天井あけの形も有り、やの多量の材の多量ハ

経営高村

辻村のあまみぬけと御済甲斐人妻本

三引の後、細れよと角引の多量を引く。左角引、経営大

路村とそゝ近世経営高の多量によし。山野村あり

莫動す

経営高村多あり。やまと材屋高多屋敷

相模うち法

口材多り。おけた、おけた、おけた、おけた

おふのち化二とよし。佛也、高木、もと多子也

一日向山

口材多き。おけた、おけた、おけた、おけた

も。或云、おけた、おけた、おけた、おけた、おけた、おけた

祝多き。おけた、おけた、おけた、おけた、おけた

一漢唐云中門有向左之序後者之通法

日暮向山中老月照松林

一
岩中社
門柱之碑文也比萬所多矣

壬午仲夏同上月作于十六日

金少村
田舎の勞作農村の様子

十禪以寢

一
卷之三

の十日

林村
上野の雪小行

一
新舊卷

東本弱多陽而新善者也。惟深固善者尤當重耳。

多身之多也以故其形而給於四達流則多有小校左

金多校尉之定北奇功回之志才少不至於千里

參差于佛弟。七日行乞念純一丹誠。夢露命之。

原色鵝鵠難期四十八處可參向于書博確幸所

警終十有二年之閒及至四十七而卒一後嗣及孫

輕風一拂千林萬葉爭秋色
誰道山中無春色

之身常人多不見數載積年仰賴無惑亦以中興尊德
教賴公崇學精首而拘之為兩故之若勤懷天子而事
忽幼之以告曰此尽至誠之志參微萬物今之既成
猶多年之仰仰而不愧外以任懇念可安置本國之
新舊之節在心念卑且卑之則苟事者所問曰而
列之中江濱有石御前有小松左舍右榜刻中和家
寔固之如去矣列苟問曰汝今求至之處而或云曰但之
列苟因之以天之有奇陽正知公弃節行升修心
自引知事重感應絕也係事之若而古之傳者事者傳可
歸本國乃有以人多厭一失二失者否方始立治方淨蓮

大慈之子。傳家數日。多行施舍。小校齋員之
多可刀之施設。從來細處著見。如某年修葺廬舍。
早午時。流傳多御印。建甚五處。上房十間。首後修
列參。江列。東本那則。建橋。今。安。新。修
之。力。多。之。時。今。方。木。多。橋。裔。經。五。後。下。修。所。多。之。
佛。門。寺。多。懈。無。家。落。無。事。之。方。場。也。上。三。牛。保。記。三。

一 土村 林村の事あらゆる
一 福島村 七界の事あらゆる

一 应永九年

一 地蔵堂 六地蔵材をもむらはせば心滿まし今

一 洗手所の波ち立て手引卷の作なり

一 淨体

口材をも津をふ全持て洗うの事

一 福正

口材をも東北野の木ももも

一 梅本村

六地蔵材の小名をも大木の物も

一 里見

中筋の名をもる事

一 異念

村本材をもむらはせの事も

一 今里村

中筋の名をもる事

一小场村

一 由岐志屋大明神社

小场村

高野神事

西野神事

小场村

高野神事

中筋の名をもる事

小场村

高野神事

乃處の事は所に間か再びすりもか地のを
見ゆるを汝或は神を乞ひ金をまきし候其事
引くゆゑあるとば多御大己貴命と天子不彌世主孫
御の事より鞠とけ神もあ樹と事と當社又高安
大津の朝の時鞠のあらう一祝と天子太嘗
會の時ゆえ主基と天神地祇の事ありて是
高安御代方と日ひつもとすちに於くと芦浦
の御代の社乃高安は古昔總記より有りて是
は妙見と神と多御初緒とて御代の事あり
ひりうて芦浦か御代と云ひ御代の事あり

代と云ひ是代の事とて御代と謂
望代と云ひ是代の事とて御代と謂
て御代と云ひ是代の事とて御代と謂
葉庭からし大内裡の時と書ひて御代の事
ク故ふ葉裏左と或ハ大極殿代と月山もつと謂
先と謂う事と假て御代と謂ふ事と御代と謂
門代と云ひて御代は御代と御代の事と謂
多御代と御代の事と謂ふ事と御代と謂
多御代と御代の事と謂ふ事と御代と謂

嘗食をとてまよひ神代より起りてよみ
をとる乃く用ひ大治二年正月より起りテ
事中御事カ。祀らう大嘗會の時神總管
仰せ天子新嘗會吉國に行ひもじき
や神之名ア聖アヘキ國とシラカシ小食とシ
龟の甲ハ燒ク火の伊豆方の國トト合ツテ亀ノ傳
ノ傳授ナリ。容易立國のあは新嘗玉司ト申すの初
年ニアテス。立國のあは新嘗玉司ト申すの初
移レ神ア追リ。ト申すたゞ。總北方近江國场
印御少室主。三番方ハ丹波。侍御の左近の郡
主。立國の宣主。少室御少室主。近江源氏の麻衣

緒より多く春忌の事と變化の傍、湯や潔身の事
は多くあるが、物もしく經年代りは代り多く
有る。總て方々に定められ、因げゆかく春忌した
は神と名づけられ、うは神焉ひを教へし
大移村 千代村の有りゆゆ
玉藻ち
大移村とも石子ア傳は仰ぐ聞奉之
大曾人主の四代後、即門跡ア文明二年半頃
第十八世達也上人、即也後主の内藤村の男女化粧
の如き、門跡の形の主附添候の者、往々後も名
と称す事あらずと聞奉之

一 莖岬ハマシマ 日村氏のものあわすり

一 三輪山神社 日村より初は社今之三輪の事より

此地をもとむち多す今之地移はる事大已アリ

金

三輪表

日村の山みの海の山と云はば地三輪の

社

をもとすも多す今之社地アリ次

小野村

千角村の名よりは村號今之

地アリ

小野村より中世今地遷

萬年ミサニ

小野村より万年

萬年ミサニ

小野村より萬年

の里之名を傳するまも

光日ヒカリ

日村より百五キモト野の里のまも

西嶺ヒマラヤ

日村より西嶺

白鬚太明神社

日村よりたては地のちくの白鬚神社

御動清せ

御動清せと名ふ林木を求めて此地と曰

母子持

御上て清濱浪逆をも奪

たる事

御上て清濱浪逆をも奪

石なし事

御上て清濱浪逆をも

神アメノミコト

近江輿地志畧卷之四十四

膳所 寒川辰清輯

栗本郡第十六

牛角村

芦村の西面に位置する村の上位名

古志村の民化國のまことに明あらわされ
て年を丙辰の後は年を丙辰の後は明あ
人の研さんと考れど女は暖あらとしもく
うりくは女房八十日とよく人のよづをう
ちくは村とよ居しとよ居るくとよ居る
村とよ居る今牛角の文字と月日をう明あ

井次長高是也久日本卓吾曰
鄴縣民某が賣妻年共以門所丈夫不歸不食
兄私心慕之成疾沾危家人知以口憐之針
無不愈後氏從惟外以多才稱之復遂至盛
名及至惟一舉登第牛角村の牛角のゆゑ
は號曰日本第一也其事行國すとす男女の多
い施設らん不口口せ厥御お院や江手を以爲
名と称すとす拳とすとすとすとすとすとす
名と称すとすとすとすとすとすとすとすとす

力説すば格抗を殺け即ち歎くすやうりし
アラ確論シテ

一天湯天神社

口材はもとより萬公の先

一福善大國神社

口材はもとより萬公の先

とての御神之集め候有松を形奉弓木拿松
主事萬公福善社拿松今より

一莫慶也

口材はもとより萬公の先

ちとて天地うつて御心向佛を奉りは
心地が悔むに御大師の作大師大和も継ぐ事建
の故とおもひる事也之大西氏ハ作事事形被

伊豆山の事より是神子の流傳又ニ至る事無事

多々御了

一圓德寺

口材はもとより萬公の先

相傳後花園院御跡章徳ニ至る事御多は火達の上人
此地に來り御真言を以て神の真言とよぶの聲を
言ひ後此一ことを列御傳今とゆく人後此所に之を
喩へしゆく地を今少翁也と云ふ事の間也

一韓忠村

口材はもとより萬公の先

一正一位宇和島口材はもとより萬公の先

一西風つま

口材はもとより萬公の先

信高大師の後を相は山城の鶴馬と是れの天と仰る
多たりとす

一 永久も

日村ふきかる年中の因基東也取てふ

やかうら風毛もむりの後もよ

西方寺

口村より是湯去まく知能院の事處

安村

雄御村の西少くの風村

伊勢村

安村の事處の村たゞ

野兔村

伊勢村の事處の村たゞ

鷹庭

七佐、坊々とも上場の内川うち月齋

葛寺村

藤田井村とす相代是利將軍義高内里陣

一

つ

せふ人を徳と勅せしものと悦喜ひて爲し山も

一

とくく綱と一句り)が小綱御と書てキモと讀む

一

ち門村

事代利義高公陣城跡

一

足利將軍義高公陣城跡

ち門村に至處お歸門

一

後の長享ええ丁年の年九月創將軍義高御自帥

一

師徒を率焉移教と射つて教誨と達く甲子の山都

一

の日十月十九日將軍少佐陣跡里三年之行其

一

と金輪車主の陣跡としとて後もよほ

一

君まう人のるるもしてとて後もよほ

將軍より御医手を歎きし

ムル所の里を名のせ奉る。末代つゝく

事洋とを徳源に祀る。年慶元紀江心池

とくさう

上羽村

下羽村

補名寺

淨光寺

日村にあり日宗

蓮臺寺

下羽村邊多村にあり淨光と蓮臺も

是原天主と比爾山延房寺の末流也有る其跡佛生傳

夢寐のゆ

一

安養寺村

重編應仁之近頃復の情事と云ふ

高野近古園山並みと並居上宿を有す

（公方の御下

知小寝御と云ふて延喜土岐刺山附の松木と號すと

此御詔勅は（公方の御下）

（公方の御下）

叶々而敵也。攻城亦如之。高祖一戰中更
已。居而觀音寺山城。為之山城。至月半。智
子。之。主將。同國軍。守。山。山。又。相。大。軍。守。山。
「深。底。於。水。步。人。踏。絕。て。」
攻。入。之。一旦。而。被。殺。之。
之。連。小。師。深。底。之。十。同。十。月。四。新。將。軍。
敵。被。殺。之。湖。上。主。守。兵。少。不。足。而。無。參。軍。之。督。
ら。れ。急。利。君。首。勝。又。東。山。向。北。勝。健。士。以。勝。道。進。之。之。
序。上。翌。年。の。後。路。を。之。被。事。く。安。樂。ち。し。復。善。上。
栗。底。序。を。や。文。國。治。て。安。樂。主。之。主。之。之。之。
同。サ。八。日。物。之。勝。蒙。勝。之。甚。不。素。之。勝。之。勝。之。

一
栗方寺
栗方寺
栗方寺

一
布
布

一
笠松
笠松
笠松

一
湯生庄
湯生庄
湯生庄

大門村
大門村
大門村

支家村
支家村
支家村

古ノ田湯次莊
古ノ田湯次莊
古ノ田湯次莊

一大門村

舊古殿より竹林のまゝあらひもて草木や野花づり籠也

得馬寺 大門をす焉へ而立木あれすすま草也

吉祥天女社

圓材あら枝の古木有能あらよあ候相

傳當寺 いは御主を左歸の庵元もまなづくらう

移石社

是長榮村の東よりむくまち古之傳也

十禪神社

移石社

大鳥居村

金陽庄のあゆにて信樂鬼の守也行錦

何の在と申すをよしに多聞あ侍徳古者や鬼原の間通
とみら大君但ちば因通或時西上へ朝令被り日大

あら多子形を製造してゆめとて唐土江戸ゆき鳥を以
て不計のをとて大き居むるやいはせりとよだれとも小走
車の内通とふい童人の林とゆけたゞい窓の右面葉仁和洋
眉作と申のびて甚希すと名稱を蒙れたり御方の鐵器板

大全曰木工寮ハ大工之所レ也也皆當ニ之古應彈圓多大工參
京都木工類奉川曰之志原者日本後記曰延慶十九年十一
月已而令天下搜捕瑞國造ニ造車工等是林目下侍曰毛

車圓多匠民巧造官商ちんじ、吳テ林底車工格送小

主造う銀鏡の工のてみゆき、吾ヤシのくもんの目をもんの前

支本事事人丸 黒木ノ木あさひの波度車工川裏纏

のち第一第一
あやめ宿のまよ
まがうけのまよ
まくらをあわせかゝりてまくらのせの中
あわせかゝるま
まきし男女のまよ湯
やま本一條をとどま正史実錄のま
どいむかわどまうや其とまを修イシ地底也の名とまう本不
義し大音居もふ神社も音居もまくし
信樂の
信通の神社も音居も一地を共に有むるのやう
一ちうへ信通の神ハ信古ハ大音也社也ハ信通寺の
あやせソアラヌ初トテアリテつりよハ信樂ゆめくらめ
ああくらめ
キモロギの神社などわしああらとあら
敷カヌニマキル本
神代の事
モモ神社

一 藤原大明神社

大吉原むすこノ界主信相傳村上天宣

肺脹太夫ノ福色御外事の松ノ木にて東壁せ奉

りとて高倉天皇歎感以て勾哉地ノ社を奉立

也とし末社西社ノ里中大明神ト聖天ノ子也奉

毎年四月中の年日

一 白山權現社 四卦より御侍弘仁二年加賀國ノ人有

生てはれ、但く六月八日生田の白山裏を以て身主清
右吉郎の方を遠辞、おま除祓未得を惜小立て車ノ下
は校機を生し、其妻慈濟せし、千叶園主ノ社生達之
やうて生校機生れあらず方へと云々末社西社あり原

田嶋神宮御室毫色多羅每年九月中の年日

一 安樂寺

大島石切ノ河ノ本江ノ山中樂寺ノ号也

雷もく東集山海福寺也末寺也正房古洋延寶元年
胃病也當此中興也刻福院の法僧也

一 八幡社 多樂寺の西門小前生れ八幡山ノ大吉原村此
生土神也

一 津去寺 異村ノ河ノ海中之東坂越ノ山也

甘利

一 大工廠敷跡 大多筋林にあり、露地の毫色見柏坂寺の裏
儀を尋ねて、大工の風景也あらかじめ自ら名高く余

常事よりは格別に想入工うや敷くよハ逃也。山本小川村
通川。之より甚大工事。宿松寺の事より。死人

通川の地大に暮し、抱恵子の事より入

御高辛村　大吉原の北山あ舟也む
越前守在

名

觀音像
觀音半身像
正觀音座像
長五尺五寸

智遠大師の修業

善祐院

同上。淳古。东坡。苏轼。

未嘗以爲危也。東長吏新任，

樂地志畧四十四終

近江輿地志畧卷之四十九

今勝弓 今馬之吉 賈方賈
寒川辰清輯

栗本郡第七

金匱經

場所一村以上六ヶ村以今後の在と云
往來が今後も

原勢中人化入極惡久之復復不寄
錢糧。舊有事

右第十八行修正

常事うち皆は鬼軍ニヤ殺と云ふ逃也往来あわ川有者

通川より北上至本一橋北半の事より北へ

一
觀音寺村 村名也むせすある序也むす観音寺村

一名

一
觀音堂 魁音寺村より有正觀音庵儀長五尺五寸

一
智院大师の像前

一
善徳院 因とすより深志寺東坂有尾寺の事より
未志以尾心東長良新公行前

一
轍地志畧四十四終

近江輿地志畧卷之四十五

一
今勝

膳所

寒川辰清輯

一
今勝莊

膳所

寒川辰清輯

一
今勝莊 銀高寺村井上村荒待村山城村東
城村中村以上六村以今勝の莊と云はる今勝
の名を取る今勝莊舊別云けり神別庄高志
久近江今勝莊

一
今勝莊人紀入植移久後復不第

一
今勝莊人紀入植移久後復不第

一
今勝莊人紀入植移久後復不第

一
今勝莊人紀入植移久後復不第

科書不復作之仍下如前

應仁二年四月廿日

和泉守清家入

兵庫

兵庫主事元良

兵庫

舊別 國住賀入道知行別
至多御食處也未收

右事勢中人多不守死入極惡者多盡於此事
汝當罷科之而後往也仍下如前

長亨元年九月十四日

丹陽主事行良

兵庫

兵庫主事元良

一
今勝ち
今勝ちの度てあり山をも手る四十
今勝ち材をも取らぬ所を益事のねりり土佐ふ
佐吉翁は此のとぞ見門をうらむと今の中野
比叡山をとぞ見逃れず今勝のゆゑ
今中野とぞ見逃れず今勝のゆゑ
善勝村上林と上山信林す林アヤハアリの里
ちと元路と申すつたのち信林其の舊の名
より既多の林材林上と信林アヤハアリの里
ちハ大加益アヤハアリの里と申すつて今

侍の御代之承る事年以降近隣の百姓等四野
の内乱へ相撲を修正山羊を守りたゞきちのちに
支那移住者を多め津清左衛門伊丹又門十七年

此之謂事與物爲二

本多の事務所
大久の事務所

ち記す事同大御神の御子事の如也

國朝詩人之多才者，惟蘇東坡而已。其詩文之雄偉，其筆墨之流動，其才思之橫濶，其學識之淵博，無一不令人驚嘆。蓋其人之天賦，非尋常人可比擬也。

治者既已知其所以生之本也而猶不以爲足則可謂之過矣

本宣石毫之多也更与高弟共之

卷之三

卷之三

人言多也若尔而之不以是時與物俱

蓮立一光是之安置
次第了極極之難處之也

支那の事実を公報に傳へてゐる。その中で、英國の外務省は、支那の内政に干渉する事無く、中國の内政を尊重する所の意を示す。英國の外務省は、支那の内政に干渉する事無く、中國の内政を尊重する所の意を示す。

古都の文化

畢恭利明 王像

明月天經

吉祥天女像

修業書下す者多也
又人所好

二王像 運慶像 菩薩像 善財像

伊勢太神宮

八幡太神社

喜日御神社

熱田御神社

山王様御社

一劫進恃

一卷

序文
壬初日劫進沙門教白淺野某三十方拉那助
綠蓮立江河至太郡至陽本多柳大角多厚
重武至多門宇明方修正真教旨自建立以來莫
忘也

絃降底類整并愚于他伽藍也彷彿不至奉勸而請勸
一操弘法大師船萼十人之獨德及地鐵續多善業成
之後則恐可謂隨身之勝地矣依之奉勸清清庶德
神經勢八幡喜日御神社之十二面様壓東西六社
之盟也毫無割合由然不容易於解故者每旬不期
勤行于今無退軒不以莫言天衣教法久住壽祚
兼旁之取終考清誦修練之行業後繼之精不所無
懈併奉祈聖朝安穩民運長久者也和光至驗
各揚乎也寔本尊者春日大明神取刻觀加如未
像也不圖能集天文十八年孟春上旬圓滿之後紀

而梵宇一時成灰燼之下畧

長物多是之多也以至文年中才以金幣
易之今之多也亦如其事也下有佛像
皆赤色無流也即下而色石泥處仍燒之傳
今佛像之多也春日之作之主者以神の御事
於此皆多金像也多之以佛工作之不佛之河
内國事有部の多也不以氏造りく氏いふと云す
之許小僧念焉もひづれり

一
觀音院記

高遠院通稱の御事也

一
空多寺官記

葛原相の御事也

大政官記

座法度主勝ち年トニテ二八年

一人奉乃甲賀郡通神

一人奉乃歸列郡三上兵主多知神

可法華經一卷八色家勝王經一部十卷並

法也右得近江國解桶甲賀郡野村多智宿達尋

金勝也古跡苟有應化聖人号金勝蓋摩訶達尊

宗黎民歸依金勝尸解之後號福也左傳范大師師
修禊安祥禪居此後凜無法至弘仁年中奉為因

家建立伽藍行覺鳴岸之價都趺膝躍厚沫刺

是間地勝地構造精舍安立佛像列建八堂以書寫一切
經論凡一千一百部法華經妙法蓮華經大般若經
之長滿東石一串殊足七佛猶從以日至于晚陰轉流
諸華絰之二味於是兼和合而佛降冷光施入
刹門改善肅賜金榜額行薦供研摩者益肩是故
二時長滿逐日無缺終日三昧守內而休今修軍加勦
經道名神坊四郊諸多中所為郊三上兵主名神
考國廟以尊崇人民之祀而歸仰感山門之精勤為
護法之鎮主吏民之祝必有感驗因茲彼寺既作國
一郡內攘禍招福之境亦已久矣抑中二角邪知是為

近隣常蒙擁護左每有災異共行斯寺使神坊感光
以加冥助殊振神力而添鎮護望請速經言上奉為彼
四不名神被賜併二人度者唯兩部創輪之外每年
各加課丁一人令有潤庸之益所歲之年公私亦請
京戶之人不處外土之民共試業准諸寺例於彼
寺課武得度之後六箇年間不折山門使谷躬洗
本業經考據頤彼名神法側園圃復滿行色若周
嘗事事非虛妄仍錦事狀詳請官裁者從三位
守權大納言兼右近衛大將行民部叅原朴居選

寛平九年六月九日

一
村上天皇官房

左辨官丁
近臣主膳ち

應制修止亂
四五疋行舉並檢田收納附
時雜役事

四五

浪東沙里小坂谷

浪西昌平山

浪北浦山清原

右被大政官去年三月廿三日并領全務ち奉呈家

靜念情心薦座不到之門也而民庶之恩不知實報四至
因於後空糢不只違律法並亦永朝章左大臣宣奉宜往
先着坐補神糲罪並令禁制修止亂入役寺四至之因成禮
行差檢回收納雜役事承以為規摸考禁制如仲

大丈史小松高松判

天唐八年四月吉

大少安夏至多長判

一
後信國玉皇總管

白川少佐高志中金保年

佐氏丸入松翁書

至後院裏正陽日制御事

院裏事行出不外逐道詔印 事事而以比寫了紙

入紙山移達之役

丁子十。左中辨宣旨

一後醍醐天皇綸旨

御子歸引禱事乞止地應行且往至廣例於皮
四五日內停止甲乙人乞入檀務乞佛經隆高

天章之大仍執造之辭

建武二年十一月十。大内乃之到

金源守經給也

一光嚴院天皇詔宣

御子歸引禱事乞止地應行且停止甲乙人乞入檀
務乞佛經給也

院歸事乞止地應達之辭

自和多十三月大内。大内乃之到

金源守經給也

一後醍醐天皇詔宣

御子歸引禱事乞止地應行且停止官家

乞佛經給也

丙午七年夏月
左史子列

至丙午年假使中

一後考叢天皇繪旨

一仰承舊傳充數一枚入之某以手口愧達此件
文和二年十月方々
大元少陽吉列

金高士免

一後考叢天皇繪旨

一金高士大善枕也高不至足而至助到唐代寫繪言之
紀今般能高士上再其事而勸法小編其事加之令
遂修營切々旨依

天皇御達此件

天文十八年二月

左史子列

金高士免

一原義仲下知狀

東高僧辨事免

書列

豐福寺之院追日因金高士之友也其土名之復房

之狀ノ件

天文之年十月方々

一源賴朝王命狀

錢食無所付下此以不金高士所引處官等可了不

任 院宣帖修止村上而人無道某武士根筋
立伊守者 之氣陽到替可真 而考水後進也而
事後之不化歸 事在村上而人石市皆 院宣自由
參押以差役反其土 事後根筋 事在後之不化
所行止也以不為 事在修用被根筋始先武士根筋
之忙後 院宣不動如休

之唐二年四月大治

左宗芳判

中宗芳判

一
頤朝副忙

龜倉及師使制忙

近江國金高守所司事至任

院宣委後倉及師使修止村上而人以不化根筋
右押守者不興福事而院宣役止不化歸之如村上而人
不布捨 院宣不裁後倉及師使不化歸自由考後根筋
事 事在後倉及修止如休

平義包芳判

原左參芳判

一
原左參芳判

書判

近江國金高守軍勢甲乙人多不以入根筋仍

恒例勤り候ふを以て抽替候し候之件

貞和二年十一月廿九日

今高守右衛門

一 墓義詮下付ニ至

天下移管へ事引拂毛致令入乙年ノ内相達候

文和二年八月廿九日 河野左判

今高守右衛門

甲斐連佐等ヲ載西子ノ由カクミサ早撫ち害候

右高士ノ抽引拂毛致候し候之件

文和二年八月廿九日 左判

一 今高守右衛門

東照神居御奉手書

追付御票ヲ御奉手書候候候へ因之御石也之現今多仰
之今ニテ之御元候因山林御本源復多除之と承不て
多相違ニテ此も佛事勤約候遂等セラ候急治ア袖
天下方々持拂へ候如件

文和二年八月ニテ 帝奉手

今高守右衛門

一 當將軍家而代し御奉手書

東照神居御奉手書文和二年八月

一 金光消經

捲藏天皇靈廟

一 江華經八卷

弘法大師の筆

一 檜岩

今御山圓教の御本尊をもとへて此一

園あらゆる上品に參く下三角の石立の偶と
あ、五重とばかり御終了一幅と勧めばやうく
かへりやうき石とよはふ情多きす。此中まづ
情多きがうすす信をもととちやうとせ
事へそとみをうやし是信の事へそとせ
トアサヒ考へる事へうれしむらや
やせなみへ眼の細どく平の音と體としらや

アシヤ西土よりやうきの歌行として事文歌
裏要言曰叢州府一指石立れ廬西モ一丈高ア人峰
子抵シテ以高人力高別不動移立カモ歌第

一 國之名

主歌より「凡高ナカヨハ一圓ナモ古
洋上の車うちて二万四千洋土俗云然アドア拿
略アドアハ迎ニ國歌下スアトと因ルモアモ
一 狗坂ち故歌

主歌との傳承アリと今も其モアモ
絶シテモアモ主歌モアモ主歌モアモ
トモアモ故歌田体以主歌モ切則雖往あは常主歌

之心作玉集檀越撰即屢用佛經傳編記之御名美

勸善而為研。捨家天皇歎仰迦梵國於高年也。
依彰安大師紹隆建臺場於勝心寺也。有子也。植
聖淨土之種。外千手觀音無垢三昧之力能拔苦梨
辛苦。同淳檀今之汝鉢二碑之是像。像年第一轉。
一切化無善程之大聖也。傳尋也。由來也。因
應也。即相長志感得之特子也。仍尊女令故作年
紀也。後繼天皇后妃檀林皇后。亦云和作。即彰安
大師依為漫持經自皇后承安令相傳之名號。雖
奉安五重塔山後寺也。至哉。是繼二代。至恩之
堯。砌廟宇於安南所。弘昌之。至廿五寺之佛法。

獨覺四年內立障三併。人滿其境。則建之。一
寺於柏城廣令成。至近觀跡之群集。奉後。多於
佛。多尊令信。遂信方丈。善緣者。到一祝曰。觀音也。來
像。善。善。像。辨才。天上奉持。龜。佛蓮金剛。一段亮
竟。之。了。無。遇。以。未。來。三。世。利。益。觀。音。也。此。本。多。是。行。自。性。清。淨。法。性。知。來。之。中。客。

柳文保二年八月。大日初生。忽遇曰。佛之災。思。行。僧。俗
室。泣。灰。燐。斷。流。瀉。瀉。滿。年。老。易。松。風。澆。水。之。衣。澀。
眼。老。僅。壁。為。土。塊。之。色。雜。化。本。多。金。容。龕。多。松。樹。蘆。
桂。白。毫。名。伴。桂。光。前。代。古。少。之。奇。均。石。不。足。詳。名。驗。

也万人洽而渴仰之丹心虔貶日合土木刀一寺侍專
修造素念尤善若加成夙之切迺達於事今造畢剗
亦遂供糧菽僕役迄其滿加慶三年四月二日盜取
中等至極雍別碑石之盜人考序某推尋體雖欲
令沾却四擗利他之虧無拂却火六度滿足放不辟
金杵仍盜人六人之内三人即時頽死二人成血癱清水
仍在之今一人不蒙罪之間成紀我思弘敘致之誠考
考之註考考既親考意像甚捨金珠捨金珠立木
官裏中卑卑則謫人殊令信修心感滿考仰義奉追
報考之空像考色於戲善善行無違正七尺存報考

化用自在而亦對亦賞良能烹之躑躅非驅馬不鳴乎
加旃席卽元年六月日又本等夫流單俗間馳走東西
弱之往還南北求之多不少失者不在也教無知彼行方
莫究焉固殊寺造宮被虧舟之刻盜人得侵舟欲奉
渡本等於宸且竊奉入舟中之知彼舟前後不動進退
惟谷依之船頭頗成奇異之是甚故恐怖之念恆之終
之絕而有志金尊容放晴求至光於丹無去此佛所
為狹之間先自側上令船移車上至本等於日本之地
早仍彼舟解發乘以無障碍到大原寺記妙考若在
國傍一人為求法令入度果求法大賴歸仍以後乃來當

寺一七〇年詔之時知鄭註之多也。後高宗大工役仁和
造宮之水其地有高人云不處雜奉安立本寺。勸則蒙
留無立處之間奉移還近處。御書云：「大工開此有跡惟
之奉易見之。」無薄扇。本寺也。又席。丙三年十一月
奉起之奉入扇。於御宮一七日御之之後。勿元奉。安
立單廬席。丙元年之後。自鍾西令傳來。乃失而忘記。
不載之。乙下署大永六年月日之。是緣紀曰。本寺之
十三年の開帳の。す。本寺之。所。既。不。先。例。之。經。多。之。開。帳。也。」

輿地志畧四十五終

近江輿地志畧卷之四十六

栗本郡第八

一 萩原村

重慶府北門縣。有大山。

一 沙寺

萬佛村。有淨土寺。有萬佛塔。有玄文。

一 宝勝院

口挂。有淨土寺。有萬佛塔。有玄文。

一 韶惠院

有萬佛塔。有玄文。

一 今野寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

乃寺

一 広清寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

入寺

一 善法寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

它立原を主に済多寺本多西山院院庭に御

一 敬恩寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 草谷寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

佐々木人少

一 菩多寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 宗原寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 西住方園寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 菩多寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 清水寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 沢田寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 長野寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 神明寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 朝日寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 朝日寺

門村を主に済多寺本多西山院院庭に御殿

一 美宦春日大明神社

善隣村井上えりの便れ所

え酒請野とす

一 金井手川

浦テラアモロ葛井川北流上山筋村

の雪よりニ流まし今一派と申ハ故名ち村の邊より
やくや下流をも上山筋村のむと馬と鹿と山と山と
村にうちれのいまとあは川と今と源

一 井上村

善隣村井上と云ひと

一 永福寺

井上村又と津をもあす山筋村

一 三國寺

門村又とてもあす山筋村の主所也す

一 そよ

河尾吉傳を主人す

一 佐野

田村主と呼ミセキはもと佐野子作所

一 上山筋村

井上村のゆゑに村の因上山辺村名也

村の小名なり

一 覚乗寺

上山筋村をてもあす中筋村の主所也

中筋村をゆゑに中筋村の主所也

一 貞松庵

田村主とてもあす山筋村の主所也

村をゆゑに中筋村の主所也

一 中 村

上山筋村のゆゑに中筋村の主所也

一 善隣寺

墨自元ニ丁玉を建立開基精光法ト淨空を修
立庵院のあらもやまも詔言を仰長み天行多力仰
の色を妙くす 俗名号す佛王寺ノ色相立日
光明寺主は長門人也名善慶寺也多大意免万勝
の色也寺の少社を天照大御富格高内神尊妙妙
天やとふ

一 勝因寺 門柱を白玉を金の裏面に正
た武昌年建之圓覺院とす

一 敦顥寺 門柱を白玉を後院長妙とす是
の後之承正七度中寺建之元基精光ノ白玉を金

の裏面

一 菩提寺 門柱の内蔵ケラモ御ケの菩薩を金と
す是菩提院主長門人寺を修善慶大師の色とえ念之參
手の後之承正七度中寺建之元基精光ノ白玉を金の
ある

一 松壽院 門柱を白玉を金の裏面建之開基寺とす
也淨空を修有ら庵院のあらも

一 常福寺 門柱を白玉を大日如來を像長ら大守
傳教大師の色とえ開基寺を常珍法ト淨空とす
之子を修有ら庵院のあらもはらの少社を天照大御

高柳

一 売藏大明神社

門村吉多御内勅任の事記不詳

一 八王子社

一 移居大明神社

門村吉多御内勅任の事記不詳

一 车场村

金猪の車場寺と傳くは名高柳

一 宝寺

車場村主淨多子南村河原流ちの事記

一 玄同大明神社

門村吉多御内勅任の事記

一 何處庵寺

門村吉多御内勅任の事記

御金勝山阿弥陀寺山門淨嚴房法印隆毫道世
坐接之地也竟結盧深修淨業歟後相流遂作淨

家一精舍以竟爲草創開祖基而第三世嚴譽宗
真上人汲竟之法流深厭世利專修淨業自行化
他猶遙祖述吉水大師德遠近緇素扇風慕德爲四
十八箇寺院之本寺可謂薦竟之基趾矣而堂宇亦
備矣故以真爲中興之祖然金勝山嶺谷路斜老弱
化尊不徧乃移寺東坂村今阿弥陀寺是也安土淨
嚴院亦竟公真公事跡全同當寺然天正年中江川
淨家寺院大半作淨嚴院末寺當亦雖在因末列當寺
則同祖同業是以于數百之末寺不問法高坐總末一老
席天正九年十月七日夜坊舍悲燒矢元和之初宮城

丹波守豊盛法名大通院蓮譽宗光修造復首尔來
星霜推移老松齋寄層垣疊磴累象勝而不可言遍
代住持各勵一双手詣堂繕修全備云爾
也以尾崎の二十四世即譽和尚の美記^ノ臣ちのとと問
ひ即譽少林送りテ今一品も不以^シ是と承故
宮城丹波守豊盛墓
田上佛
里津庄六村牧村六村中仙庄六村以上十
八村をまげハリのすまき山を仰上テ呼^リ田上ト云ハ
不即^シて照大神影向^ストモ太神山^ト考^ム
田上^ノの名^ハ多^シ又湯之田上の名^ハ修^ムトモ即^チの
トキ^ト也^モ少^シ乃^シトマク事^リ

縁起本多と附合後續本多は次田の名は
本多記不より谷川と云ふ事の上と之に
本多ノ立高村を事有田ノ上トシテ立高
村也多加ノ事ナシト序

舊事記曰天孫八世孫倭得玉彦命淡路國谷上加
母為妻生一男一女云々日本記雄略紀曰十一年夏五月辛
亥朔近江國栗太郡言鷗鷺居于谷上濱因詔置川瀬
舍人云々皆乎少加ノ別

史石集

十一

文正集

十一

わづか印の山の絶景すそに海の波打ふか月は

富士而首

高氏

高木山印の山の絶景すそに海の波打ふか月は

富士而首

高氏

細代あまうきわく印のものねじふあるおはら

五味草

高氏

多めとよまきわくしゆだまく印のもの甲斐や見
一黒澤山 稲澤村もはね方支村閑はねまくとおもえ
甲斐もはね方支村閑はねまくとおもえ

八嶋電火雨歇平湖五月秋晚望邊滑り過蘆洲一天星
計移瀼岸万解明珠撒夕流冷光騰空疑舉燧飛光
拂光覺焚舟暗中如畫溟山畔恨不潛陽來共遊

一大日山

湖多ふも少しふくさう大りをもとむる

つりき二尾山もとよひ土俗よ上古牛せてもううの傳
多きの傳流多きあく止みたよとまくとよとよ
外生くもとよとよとよとよとよとよとよとよとよ
多きげれふくよとよとよとよとよとよとよとよとよ
多行う事体備覽と萬神とよよとよとよとよとよとよ

ちよの地のよと

一大日堂 乃大日如來坐像也太口ちと黒く

縁起曰大日如來者行基大士之所造而天真雲母也唯
脚頭因偷而其餘尊取島房髻也古往今來秘佛而雖村
民無拜瞻者近依于堂宇頽敗村之信人等再鼎新之
其次暫時間亦令結緣依之皆始得拜謁作難遭之想
也山後湖岸向孤虎有小徑龍神住詣之路也人号
之曰蛇溪又去堂十餘間許有小池号乳池也云々

三室薦神社

大日毛乃大日毛乃

薦神毛乃

一乳池

大日毛乃清十鈴乃清山あり小也

一

不深堂象明禪少子て、多の早懸とて、水薬草を
帰女乳せ乞ひ事す有時水を大日毛乃はるひ水をうけて
戴りうれし帰女の乳涌出して化是の事也

一權衡石

大日山の慈湖水の注山を形如蠶甲岩根水
底に立木ノ根アリシキトキをあかしよ處二戸立有高
水塔付上岩を伏せ相傳湖水其方の上すすむ所近江
一國治水せ故小毛乃芳を姓取事して水の深際を測
セム御近世川村脇人とも者有命水井半山於水
筋而遠ひ有子今ハ權衡の制しなれ小也

一鯰石

權衡石の傍小有子ニテユリ移転の事

一三ツ石 大日山の湖水の中にある島の上に草木
の根柢ある處がある。一ツニ間四方许一ツ九尺四方
一ツ半間四方许。月をも言ひ立半

一 竜王岩 四周八百萬丈を度す。其根柢といふ事で
そぞらあはれと云ふ。此處を同へて、この事なりと考へは
徳文院乾王常あまく在つて、うるま旱しきて、やせき
雪と梅うさぎして、わづかと事なり。

一 大日崎 乃大日山の崎也。

一 貞御瀬 黒唐村の靈場也。山河もさか方より
南に江越えし所也。川幅百四拾丈。周有公伐古瀬園。

庚午所ノ有元源御改新築園。は御町十二間。ある巾下
八十步。ノ間深也。一深三步。を。ノ。草木の。る。
背立也。其外ノ上下。大。立。也。其。の。甲板。小高。也。也。
瀬ハ水の早く流。所の。よ。ゆ。て。枝。木。を。せ。也。
ソの。か。り。て。は。き。の。下。居。た。也。和。剣。少。鳥。多。也。禪
高冠者。免。被。じ。も。馬。は。の。也。半。駆。通。方。の。民。を。廢
路。して。川。を。廢。す。或。日。其。駆。路。の。夷。して。二。千。年
後。と。名。舟。一。人。を。道。が。と。舟。も。あ。た。ソ。に。後。船。を。上。供。ほ
渡。の。名。ち。ゆ。不。天。武。天。皇。大。友。皇。子。を。避。て。太。岸。の
宮。に。生。吉。跡。お。転。也。皇。子。名。湯。也。足。を。逃。て。天。

武をもとさりて路をかへ住む所を爲す大和入河と號
一其地を離れて中南の山へは源を起すと源陽山源
山里原山人也其の東海へ船便をもつては天皇主事と號
源源と号す御みと云ふ或云源姓源法の脚也源ゆて源
代を没け矣を御て好色貞夫左山源法承と名有く
ヤシノ事或曰祀にて尼あらう侍ゆゆく法の號也か不似
まう御代弓の古かよしつひ侍のいきを用ひ厄除除
祀す貞法の字小作事に盧襄能小曰祀於聲氣の事
會すの事よりて移を引きぬ處多深一源事や一其の事
稱毛席重威捧谷囂帝重朝を史として曰上重威

源氏の本事で、城落たり。お儀よりの帰國日也、此頃を以て
事本也。本事最初不詳。彦長のま。吉原院の御所
ト始りと今昔も語り近づき。同志實那古市子の本事小
足鹿と云ひての事。あ。吉原院の御子大源の
御子とて、乃知と號。ア。御貞とよび。御子曰小由
居。御子陽と號。後は高橋とよび。御生傳を越すて今青
木心足院と云ひ御多川の御門也。とし清つて、巨桜を
みて、又その御門を御子ソウ木及後故の木を、二家主も

支本集

時めけて、今日よりまぐれあらわすとき、席を取のばせりて
はかばか近習むべからず。今日の席と云ふを以て、坐り下りし
墨堂 是水涯も有勝所。望雲を見ものす。やがて石灰土
傍の林をも見ゆ。他に景もなし。市上宿の高きを大いに也。四月のまゝ
舟の船で山の高きをよみ。蘇州にて、舟の宿の山宿て。ち
ひだの竹を手原川の舟とひそめ。あらわす。

夏枝堂跡 黒摩也すすみ（ちくま）の堂跡のとて
文家も不絶お併在（窓）の傍を過じ軒扣る毎月七月は所
小未て靴をぬき軒を出まつて踊念佛（よどんぶつ）として以

の薪扣もう子端今木村小あまきへはま山の假ニ体を昌
さま木易拔一とおけども喝あひて湯の死名氣の假して
六月毎の川多アホ根もち木也帝都の西角四壁よりて是
をせんあら有是を以て是の下まの地ト大庫の事の如
四角四壁の中々これ

本集

永光

本集後回の序の清船ト、本年といひる易拔一と
其歿あれハ易拔堂之御みひを一曲ト拾玉集為法、望
回の上や納代々々のむなれと來て見。、是の流しうる
御和の七日未ア一曲ト連居の事シカク、後う続清全集の如

たれ本藏の本集トニヤリテ既往復莫く々是を區別し
あるを待のと

一 庄根 是里澤の庄場也南北十方東西方丈人御主事
至彦高の。、ハルヒタケラノ贊

一 觀音堂 黒尼寺也うち聖觀音院主の守聖祐ちま
ハ少セウツアセ奉一七月十日トハヨリト開設トう回鑑

一 光明寺 月形寺也堂宇ト本堂佛大善院の本寺也

一 黒澤川 或ハ田上川或ハ信樂川在云源テモリハ伊賀國於
云岐峰より出焉也源シヤホキ信樂萬の東川北を經て
甲斐州吉一左衛門庄也の北を過ぎ大戸付境より西の方東

おれ山上牧村吉宗の曲で、是月と今一月も處て附入つ
黒雲の山間よりきて、炎の東村より、東北へ一派とかる
「お弟山前より而も虎尾せよ野」今て一派は故善山川信樂
の名をそり付樂川り等、牧村の傳承で、山上川と云ひ、
此處もとお弟山前等して、馬川といふ黒雲村の傳承で、
馬川といふ古歌山歌も、其の山上川ねらふ

拾遺集

元輔

若上のものか、一月は日を離て、あらわすよもよが

續古今集

本左大臣

夜の山上川や冰もし水底の氷や河傍かな利

猿渡撰集

圓開

夜をきをめり、さむ佗うれはは、山上川の馬頭也

新猿渡撰集

勝光明率寺

かくまゆをす、うらみゆもあはる前、の内月のうち

新集

夜星月大臣

冰奥のうち近の山の風吹て、山河のあらぬつらば

因

知家

せきうち山の上川乃下、放木迷、水のあらぬらふ

支本集

隆祐

かくもの咲ふ、一日よりゆふた、夢の前、山陰をまづ

一 太支村 或云あた太支村とて高澤馬鹿村の通す也

一 左玉堂 おまじくより度徳の公一體をあたて印相及作
ト文乃澤高アリト

一 午天皇社 太支村下馬鹿村太支村主の先末社四社を
石碑に至れ毎年三月三日奉ノ日也

一 大通寺 おまじく馬鹿村大通寺主寺也

一 高良鷗 湖中ニミテおまじくの鳴サラモ

輿地志畧四十七

近江輿地志畧卷之四十七

栗本郡第九

膳所 寒川辰清輯

一 関津村 太支村の南に國はあよしの別名柳
井川國はもとより古の大石山國也レシル
や久くも御より是はの名ゆすと云ふ者大石
の名ゆすと云ふ者大石山也レシル大石
此國とくに山也其はの名ゆすと云ふ者大石
之山漢書云國同天也入年四月有官府置近江
布政使不詔事之云此國刺子配國司健兒等

正
鎮守之唯相坂是古事記時屬聖遷不閉門

雖出入者禁年代久矣而今國守云五位下祀朝東

今も上諸加二社闕而文猶空之也

一 新茂智大明神社

上宮は村之名也中津川の源は

多紀年三月アキ日吉社也

一 若宮、勝社

口脇多紀年アキ年アキ年アキ年アキ年ア

一 小矢坐櫛

周圍社のち小矢ノケミシ松原
トシタ後多紀年阿佐根ノキニテ辛味モナリ

一 美作、名寧

は九條

甲のさくぬのまつもく御子アヤ便のねまとくじ

一 父集

信代

ウツのいづのいづのいづのいづのいづのいづのいづの

一 名寧

伊勢

風吹きものかものやとまきとまきとまきとまき

一 白山舊觀社

小矢坐櫛主土佐守了前守

おもゆり

一 石の雨垂

小矢坐櫛主土佐守了前守

の方アソサシ凹なり御主大人事界を経て

上

一
矢箇

伊勢山の名と歴

一
仲

うとうとくのやうなまづき

行在奉勸修教化

諏訪明神社

毛詩傳

清大考之

是れ御世より國はの如く

事とお向うで御はる様子を覺ゆるに堪へず
其の間も又はるかに人所の地名を尋ね

一編名寺

國慶村少主故鄉之西黃泥村居

卷之三

楊因

傳
說

まことにやうやく、口あらわすのみかと、

七

修
政

三

いぢりのまゝの筆ひづらの筆ハラレサセの筆のと雖
右筆跡行不立筆モレモテ細い上部を多く用ひて左
も左も亦好んで下部

卷之三

舊約

白鳥のものもあれば、白いものもあれば、
一 中仙庵　　里村枝村齋村の某村も中村の上
ちねとよもせ村とふくらむらのう村のひゆう
金子をもとづくのたしかくやめんりの

一里村

一
飴清大明神社

多忙であるが、向來の如きは、吉野お行徳大社
より十四村の御事とある。即ち行徳と申す大

明神を祀りし、宵々の御事せらのと申聞
より、此所は白村ハ甲ノ河十八村たるを村名也下
あり村ノ聚落十八村也。終より是村なり
今之村の御事と申教書に市役者主事近花田義
神也。幕末連秋四和子の御事也。御事ありての事
皆也。大社の御事の為候り。

卷之三

舊唐

卷之三

傳
序

物語の事は、おまかせにまかせた。おまかせにまかせた。
おまかせにまかせた。おまかせにまかせた。

西方寺
里也木乃海古山
西運寺
因河

周易

福島年流　黒井をり若狭の元も舊古の大伽藍にて中村
庄二村を以て一不幸の事一ち候の件と記也

卷之三

古之誠也。黑道之上有今之誠也。ありとも事は後尾道す
や據りしも直可い。信石多羅風四席三房光般りもは近浦多代
鹿流也。六角家の旅車りて、高野及信榮毛うて、卯たる
勇士也。信忠長波の妻の左守の懇也。信長生宮けりと
大和若狭より、信榮毛のとと道可得道あり侍一人也。

右卷之三

是黒村のむかし本ト黒村の因ひて近

世別の村（なべつ）はれり草原手（くさはらて）の回蹟壁（まわじきはせき）あり、故小寺の名と改

一 在石室古跡 石室も、もあ事性古の材も、もくを立
て寺守（てらまつり）をして、今小僧（こそう）がはまざと極めの佛
多の材をもとひよす。

一 枝村 黒毛うのあざらすを供そす是古へ栗ややの大
栗樹の枝をまとめて集めたり地故小なりと云大明
天滿天神社 枝村より勅請の奉元か洋使（えいし）あれば
建立（たて）せり

一 安樂寺 枝村有むる薬師坐像教大師の作

あらゆる用事の詳

一 岩窟 桜村の山下まゐりお宿（しゆく）つゝ元へり是ち火の
ゑゆく一時乃のを御前也（ごぜん）する岩を打（うづ）み集めて牛
ふく去傷の火取（ひとり）すくらひの本（ほん）する大廟の文書あて長
電も早紀小太而の又本をもあわて刻も印行日本紀大廟と
書の筆を畫しても見りて大の字を彌（ま）のせ一筆不見
やうな冰面（ひょうめん）也（よ）みくわくし或の宝物の邊（へん）すよ
鎌倉（かまくら）ともあるとし御ある一是岩窟也

一 不動寺 ち神山よりち神山へり里もよす
之を御山御院方勅寺と是度源起曰清和天皇の

清す林を洗三井寺を造営せんと欲へ奉承明神
を小泉村とす山の東に坐奉はよまたまもきわと金光
を想ひお院にて事遠羊腸を耕掌みたる山のふと土産
せうもを爲日天照大神目をじる及び樹木森繁多の事
靈す也故お我事山もとまともおふ景也御成佛像を
照拂せりと御成佛像にはむく用金意の充有す不動明
王歎美御うり御宿坐れ御成佛像て曰我り是天照大神也
と云畢てあんちだか手をもつて様作の御宿を
お窓より入り御草木疊立すをも御山よりもしきを

御物院（ごものいん）と號す辛子年あらわくやの像を立て是文智院大师
叶作也承年正月九月廿二日と廿八日山立御院の（あ
一
ノ辛僧度（ノハツセイドウ）アキハル

栗苑（くりその）或そ梅雨の字あづり左鄰山の境内すあり其
池大さ立高す有る計り承年五月梅黄み初極花開一栗
苑高さ比高滿前り（まへり）あれを入樹（いりき）朝立花苑の色
樹木枝以水珠を生次毛色白黒して形奇りとく或
ひ三人と或うて立す此花苑のうち銀杏色山間の地亦
妙好甚（めうこうしん）ち候皆其水深す半丈數尺ありて樹あ
くの日々じ水深自地山底えりけて蓋兒倒立跳

之の臣接す。主は微勅の事奉を以て御目立難祖焯推考の書
書を載す。四時算至安山は立夏後庚日十日を以て也。此
と一也。種の後土日を以て入楊夏至の後度日を以て也。楊も
おはせの後土日を以て入楊夏至の後度日を以て也。楊も
利事時珍う迄おはせの種の後土日を以て入楊土暑の後
土日を以てもれども、其宗樹軒の號は毎日楊
室爲く。而して皆當日より後雷鳴とて。淫陽と
を爲し。よどみのり。而仰馬丸中豪士町の御巷突
徳門本人の後闇中楊の元より。よ有朝も早起。

水涌かて。わゆるのよきが水涸楊庫。固先田那。母坐け上當
至野村。栗原為左馬。とよより。は後園小穴を生じ
几玉春以後而テ。又自始了元を生じて穴のあくを以て。最
を以て。萬國推源。而ねり。楊の朝。いわく。あ
拓て。もれ。土多。仄晴。とき。翠青色。山根の枝枝を。一
ソ。で。火。ひ。うち。川。ひ。とき。いづ。地脉の枝。もし。ふ
せ。す。紫。紫。紫。紫。の。火。ひ。う。難。難。

影向石

石。鷹。雲。壁。陽。川。津。あ。天。鷹。石。鷹。

鳥帽子

鳥帽子。青鳥。鳥帽子。如。大。兔。

叶石。云。

古今林

は行もせば、御葉打ちの枝材を付

此節考之
蓋地久之
以九經年
于里外

人間事
身外事
不外乎
一念之
動靜也

卷一

便心集

卷之三

但心幸
口不言ひ事あむれちの事
多居ち
口不言ひ事あむれちの事
多居れ
口不言ひ事あむれちの事
多居れ
口不言ひ事あむれちの事
多居れ
口不言ひ事あむれちの事
多居れ

新編の古今文庫

楊社

堂村之年如舊如新
歲次己未年夏月

卷之三

卷之三

野
村
集

多谢大娘子，你那口也记不着我。

ハセキヨシマツの物が丁小補教會の住し物である事
より此せうば材の杉草とて此多度之手作にて

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
一
一

一
二
三

口付多々と解りておられ候事は也

お所除るやうに西引と申され候事は勿
宣取扱つてある事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也
カリ物もば爲り一湯あれ既而を申す所事
りそれらゆどほりと申す事は既と申す事は也、既に達成の達候

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也
蓋げし再び申す事は也

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

口付多々と解りておられ候事は也、宣取扱ひ候事は也
申す事無く解ち候事は也、宣取扱ひ候事は也、宣取扱ひ候事は也

舊寺物悉散戶以神正面相以上方事事則福主
藏之為之福多被厚至福報到而眼無多
處是居門藏已仍至佛像德于物乃物外中也付
之乃多濟南之福事也其清顯為各处在寺大鐘那
伎像寺高加勢多在也伎寺多七寺乃多事重
私因之利也副武代奉勑于大將軍足利公之幕府坐
于江東之佐木家第六代久右馬自吉孝安小泉右馬
乞貞興子也貞時考和川小泉博主也敗軍之流客食于
志田之寺尋為娘子當時佐木家衰微而侵軍又
難敵久右馬門也門論登故在法龜寺ち西。領額無方

一修補終鞠為漢草甚本寺破壞如故左近鹿寺隨
涇城寺鳥序可痛哉不仲九世孫中也左門口久左
門久右馬不恐看先祖之墳寺荒涼如故頻登覺落落
之志願奉請領主本多天之許諾可謂有清弗棄基
寔元祐立土申。每歲也終財來到年因修至正二
乙酉年奥有中野村祝事教徒佛教俗僧甚所假
称道場而素無之。正月左僧數位有社之典去
門後竊憤之清寺号於佛光本寺故因刻木造之
以示新造之寺院號之左僧數位空居古刹數方之
号而得欲棄略其旧址山林給佛光本寺吉和亥由

許之以法藏寺号。於是立寺于縣城前大守志正永七年秋七月十七日田上門滿山陰溢而中和村甚多村口有水路左福西村。於今久缺歲己丑寺之門朝日大守天許送其為五月二十六日移後法藏寺移之旧址於新芝之寫村鷲尾川神东小太平山依回是正音山法藏寺移之教安昌。是歲海及庄高門等刻梵文太守秀復賜良木亮
株塗之用

一福龕寺 门村之佛龕寺

一新免村 中和村の免寺

一新宮太明神社 新免村

一古陣地

門村之古陣地と傳焉

一外内社

芝原村上の外内社傳源内社と云即

一平野村

物村の平野村

一天滿寺

門村之天滿寺

一西光寺

門村之西光寺

一相生村

平野村の相生村

一矢張大明神社

相生村之矢張大明神社

之年紀不詳而據之寧原年社炎上月四日辛未二月六日
造立正月十三日九月十三日神事書社之言

一正体
口林立
年中
和善正義
蒙立為法

二年已亥始ノ西体ちと東洋車輌の事例

輿地志畧四十七修

近江輿地志畧卷之四十八

栗本郡第十

一大石庄　後村東村龜つ村小田原村笠上村を下
大石の庄を黒澤の庄とし行乃郎と子年とす
るる乃名と文傳と大師と号す大石の旧跡と周辺の村を
周辺多しむる今不賛るるを玉保と而名とす

一 東村 ちのむら 一うち 周辺村の南へあり
一 東有川 源を甲賀郡多大村の西より、野原村と

津々田利川ア富川村乃あとす乾て橋れ車ノ引

又乾く曲直ナア東村を經く御ノ入ふ水之上りかの川

モ甲賀郡朝木松山ノ竹界ナリと出事、也、小高合川

ノ富川村の傍ナリ、七八間或は十二三間ナリ。又多く

御入馬不樂水まよ川モ虎一木方ナリテアリ

一 橋谷 佐久奈止社ノミタヒヒ別佐久那谷之太七軒

乃一毛奉之公奉相隔二ラツウ

史本集

兵鎮

少不てもや橋谷ノ彦萬郎信し後屋治乃足代本

名寄

佐賴

志久ノテ橋谷ノ是乃由一木アシテモ通ニキテ
一 佐久奈止社 事有(アリ)高神一座御職津命也
土人語云橋谷社又ト橋奈止大神神社ノ皆但ノ孟浪
乃言可笑橋谷社ノルヒ有(アリ)ト延秀成曰佐
久奈止社ノアリ文德真錄曰敷久能度神ヲ三代真錄
曰佐久奈止神(アリ)臣亦(アリ)御藏津命也 天照
大神乃主鬼ノ内宮(アリ)主鬼也(アリ)二所主神ニ御鎮
座傳記曰日向少戸橋柱名而拔除之時洗左眼因以
生日天子大日靈貴也天下化生名曰天照大神慈
魂慈參神也謂後戸神懶厥肆肆神是也(アリ)良

彼命傳曰菟掌宮一座伊弉諾尊は石耶因以生号
曰天照大神亦名歟國津比咩神之臣橘止と
蒙社を佐久を止社と号す至高年号即ち橘止と
未經山之東理佐久那を祀る落勝溝連川ノ御坐御鐵
津姫止云神う佐久を祀るにわざくしの事ある
名うち山乃れく伊勢國度今多知總督郷豐官属ノ
井名とす地も井名と號裏神祖不源王代井足と
書焉ノ古者名を足と云足と太理ノ此則佐久を止
利合とす本く那と助役より佐久那を祀の理と下略
トと左と止をタキツテトとあちのお邊ノれも

佐久那止ノ考一
正月七日甲申を授近江國佐久嘉度神社立位上ヲ
文德真錄曰仁孝元年六月甲寅沼ノ近江國多久嘉度
神列於明神ヲ延喜式神名帳曰近江國栗原佐久
奈止神ヲ佐久神每年三月三日御旅所ノ神事ヲかげ
同月癸二ノ年の日神奉也多社ニ産正八幡玉高日社也
土俗湯ノ小篠谷社石代十面多母切焉ノと卒令附
禽列刀を取るの事あらずノ水門ノからぬるとして毎年
新ノ臼の壺ノ木ノ是れ明神の御向ノくより川の
向ノ付ノ神ノ木奉也ノ以上佐久を不動

明王と云ひ歩々今東村より人びり而て向社の船起きて
一色舟を引つ是をアシテトモを思忌度一事なり院よと
アリ翁の聲なりも多きのとく土佐古傳より丘の伊勢奈文
す西より出でまく詔より

一 廉龜 是佐久市止社乃傳所よりゆき渡す處也幅二方
四尺大水の内より十方計もしく切面の長セラ许山とく
乃名多君と幅八分の有ると云ひと廉龜と號す
多江は名也と云ひ百日間同行せ檢見あり廉龜の之
もち定アラシ半升ありと云ひと傳ほ廉龜と云ひ
日本 台廟の事例也

一 石良瀬 則廉龜の事と考據く

後頼

一 氷奥し世を位シヤシヨリ奉多御代也
是多田上にて石良瀬と綱代也と云ひと云
送愛石 廉龜と云

一 妙見山 五井山と高千丈并許山上と妙見祠也

一 妙見祠 日本と云古傳より神咒經曰靈符本尊
掌少斗祿存星宿号星官以辰喜菩薩名曰妙見处閑院
方星才最勝神仙才と云菩薩大將也、北辰菩薩陀
羅尼經曰我北辰菩薩名而曰妙見一个欲說祚咒擁
護諸國土所作甚奇特故名曰妙見捨故妙見

寺在王塚四方日本靈異記曰今諸國妙見堂と云
妙見堂は清子院より下り千馬相馬曰井ノ島と號之と
名跡畢竟ゆきとちと少許く妙見堂井安の御所奇
是も總列の事の妙見の影像記してあると云祠也聚
乃翁乃進復丘山元は本二教也

淨土寺 東村とも妙見山淨土寺と号ひ有馬の御地
如来春日之化也淨土宗大津淨土寺の本也

法寧寺 ロ村とも大石山延命院法寧寺と號ひ本尊
常印如來慈尊不動の化ニ并ナニ神乃日光月光と天台

宗比處山東塔心谷總持院乃本寺
稻荷大明神社 口村とも鎮座の義不詳爲之稻荷の
裏山と前向石あり

昌妙院本寺 ロ村とも或り昌妙院堂多々と云は傳音
を至多あり一跡とも云

大龍 口村とも又ナ丈四尺高さ五尺山の間うき
傍引ひく木根とあり御水入る

地藏堂 口村とも佛乃は多々有り石若大龍乃
中うち上り下り下りけもし淨水ありて有村淨水の事也
うけ乃地參ハ後は太師の傳ありと云

一 丈婦石 東村の西川下をも鳥リニ同名も

左塙野 東村ノ内ヲトシテ廣野加」とセ七十八年

安樂ノ新田トシ

鞍骨 東村ノ内ニ或之松郎ニシテ
中村 東レノの角アヒルヒ

高王寺 中村ミニ或之奥乃重の旧地トナリヘ淨土堂之
小山判官屋敷跡 中村ミリ山之土俗呼ノ小山火出山

利支人ノ千年詩句トシ

一 大石屋敷 中村ミニ二所五ツ山ノ下ノモト町を
安樂ノ内ニシテ之祖の墓は因ミ今ち千年也アリ

志高ノ向南ヤニ十間の原也大石ハ元江原の御庭也
の人に追放キタハ清ひぬふ呂ミカハナセ給人ハ
近世の思慕者也因ミ古木紀之ち古良體ハ内閣取事
政移キアリ而指テ吉原の地を沙門院西久秀繁の園
多々父之経由也沙門院西久秀繁の子沙門妙羽
也沙門院西久秀繁の子沙門妙也也沙門良徳と子じ精
五弟アリ祖父母也内閣内也沙門良徳と子じ精
内早世也沙門院西久秀繁の子沙門良徳と子じ精
感望阿リ也因人有小主んちアリ之原十四年物復
沙門院西久秀繁の子沙門良徳と子じ精

支婦石

東村の多川口と鳥ケ山同名也

左塲野

東村乃内多「左之助」と云ふ。庚卯加」と云ふ。七十一年以來

宋鑒新印

鞍骨 東村乃因之或之枝卿之子

中
村

東山天王寺

新主寺 中村之助之奥乃庵

小山判官屋數跡
甲村之則山之土俗呼之小山又以小山

刺史行狀

大石屋敷 カ村を二所ありテ一ツを山下へり二つを町内
ありシ内を今之祖の墓は内に今うち年地ありテ

萬葉の間南や二千間の屋敷也大石ハ元は御の御門道者成
のまへに誰在年々ハト音歌歌ふ居也か除大石翁今ハ

以移す事あるを指す事也の如き沙門曰是以爲然の用
知也夫之爲内也沙門曰佛家國也之爲沙門也相
安也初尼羅尊者經乃祖丈尊曰勿動勿動勿動也亦德の
五焉より祖丈内也勿動也勿動也勿動也勿動也勿動也
内早也此祖端除本體之全也勿動也勿動也勿動也勿動也
威望何り吾国人少有不慕之者也源十四年初復
江戸に來り即ち滿聖寺祖師行のうと其後去らるる

良英等を極りて終て其道と拂あり是故也と云ふ事
を承る。良英は既よりを承り、不才と自認し
と幼く公法とされどもとひ昂ふ御法離敵志を良
基日より前は良雄も軍七八の意士を下す
至來力と見て終て難言敵吉良良英の前とほ
其能弟下の北とぞくに於て一朝族並道重
賛弟士の列あり而年の中四年、室鳩草先を義人稱
とぞ。序四年、雅をあまに長傳とあつた。其後流れて
一大石門、或ち中村門を經て流て後若狭守よりおま
流れつ村と通す西より中村流村の間を歷くに當る

と源入山門中之字記

一 源村 中村のあおわらすの家の顯注卷勘定によ
とみと水の流すとぞくふりをかくとすれど文
とぞく源とぞくは松とぞくは松とぞくは松とぞ
一 いは社 流村を

一 いは山跡 流村を多く公華園とぞくすと城山と
とおはせむるを看以て城の也とおはせむるを看
とおはせむるを

一 一は山の古跡 流村を多くおはせの内華園とぞ
とおはせの内華園とぞ

おちの原をくまぬりつきとよ

お念寺 深村を浮かす大原草深ちひあを

新門村 中村のあま村

正川村 おれ村をう

西郷寺 お津をあら村を

新善寺 けい

喜福寺 おれ村をたまたちのやういもみの
をゆけり

小田原村 おれ村のあとあゆむ

ら尾ちおはおほがとう尾ちとみちゆのづけの里

やうじはを原ゆとくらを參すもあり様へ方洋のゆり

はなら尾ちのやくわやまのうらもくは幸の争ふ

はあくせんとお村方お村祥吉も村のゆりわら

おはなゆゆきこちゆゆげ続さうじこ

一ノ主寺 おれ村をおほきくらまの社あり

あふぐと傳ふゆまえのゆら

一本寺

少室寺をお參るやあらとくら

法華寺

正王大原神社 お村をあらゆる

一ノ塔社

門村を浮かす大原草深ちひあを

二社大祭神社

四
卷之三

卷之三

白帝子也子十一面觀音

卷之三

一
字海印集

是少卿之子也

國朝文忠公集

國之多也。國多之多也。國多之多也。

鷹峯

卷之三

子は、間合ひに難子のちをもつて、其の名

一
萬葉

従事の西からアーネスト・ホーリーが信書の内

卷之三

前文と少く同の内。多事の元と師弟。師大門

卷之三

居てゐる地名と師走のうきやうの字と併び

水經集解

水氣無事。傳教都已經完了。紅茶到了。可以了。

茅火

芦火たゞひのねハサウエトシルニ前了

挿角の傳

掉席の帰るを以て是處より外へ向ふの如きを乞ひ

約古子集

卷之三

端紙を除くの外はあらねられぬあとはじあると
丈も生 佐根翁の筆と云ふ人誰とちがひう有す
れとのみあの文様からて抱きとゆるて渡はん
ツの和事ばかづくの事なりりつゝの爲の因みゆ
とふとく

一 岡島太田神社

口付

一 安興寺

口付と申すも御殿主と申すま也
御事と申すも御殿主と申すま也
御事と申すも御殿主と申すま也
御事と申すも御殿主と申すま也

便藏せし里の石碑と古松並、上三美太子の碑の連と
御の跡地本尊も御事と申すも御事と申すま也
伽藍と建堂は高麗もまたと云ひ

一 楠木大夫社

近は山林の名ふと或は山林

ちもとと云ひ近は高麗材と云ひ御事と申すま也
御事と申すま也と申すま也と信吾を更と申すま也
御事と申すま也と申すま也と申すま也と
院されりと申すま也と申すま也と申すま也と
主修死方と申すま也と申すま也と申すま也

萬ふ三年の主の妻と修了せらるゝを期とす。之の後
多ゆる。様丸たまへて載りしるが如く。之を
流ち下門國へ流る。其跡にあらわす所とす。之より前
は、様丸の所と云ふ。大字の所は、様丸の所とす。之より後
あり。此の様丸を表す。也。之を御から割り下さるる事
及度。詔も。又。様丸三人を門名家人にして様丸
等。人乃様丸。様丸。曰様丸を又古姓。名。姓。の
人。官門。而。先。長。因。方。又。記。曰。上。門。と。開。之。様丸。太。丈。
多。考。か。即。の。と。云。其。所。の。上。方。事。と。云。不。可。之。索。

過勢田橋就南入勢多山中出松山下沿河畔而抵
大日山直下八嶋供御瀨也有民村曰黑津自此涉
田上川過閏津至于大石大石寔可覩焉左有河川
多奇石布置巧妙而如人之故作趣也渡獨木橋至

。但

櫻谷有祠曰櫻谷宮佐久奈
芝社也古木森々同宮有○宮之後曰康飛厥岩瑰奇如鑄流石如藍激石如絲已而入百谷山有百谷故名過谷則曾東村也自勢多至無几三里餘矣余問猿丸太夫曰跡村老指曰去塲一里許有猿丸祠真地名猿丸巔又有一池稱猿丸池余即躡草烟雨霏霏濕衣山徑杳冥然到巔則有叢祠余拂襟棘而上時有僕折榦來即祀之低唱奧山歌而三徧揖而起矣歸村又問猿丸巔幽邃則幽邃矣然吾想非古人之可棲止者疑是其遊歷之处也倘別無称猿丸之居者耶村老答曰溪上有岩居或

謂之猿丸曰極相傳喜撰法師自寧治山來以信名去是乎余曰是也同遊曰昔今朝之超白洲渡至彼岩居危乎一里乞尋之可半錐朝它後亦知何日也余曰然也因而登舟水急如箭轡卒掩目驚子不勤從水之力操竿如遺到岸即行溪向奇絕往乞記是則琵湖之下流所謂称海老尾者也遂見岩居其岩圍青山臨碧水其下百武許有鉅岩突兀高可丈丈佳處甚多空翠之中不可久留嗟乎非有仙風道骨豈能堪擣遲乎既而經烟村出石山它日欲訪之必可從石山入先見岩居而居抵曾東村或攀猿丸

巔也若追慕長明之故事涉田上川亦可也余略記
之以爲後來追尋者之司南甲辰之秋九月十七日
記之云某人或人云因上り下りをほかと云
てもそぞく様もをくらまつためさうしてせうの
券も書つせんとハ余人一ひと
帰金子 金子打つも福寿院内金子とあると淨土
宗系遙原寺地主
縁起 金子村の人家と申す一町すあると川の
而も引山の山の上に金子村と申す山峰ニ尾村と有れ
此の川の左岸サ四面狭ア似ち大三河深サ二間五方水

若狭越山の宿路
若狭東村より山越二尾谷へ
桙木山 小田原村の若山宿をも

白雲山
桂園の東面川村のあそび

伊予守
甲斐の御子
山城もとまつる山

少様の國事（ハ）は富川村の因コト小名シメ
所謂納利涌出加河中上子上（アシテ）中階石倉等行也
春日大の神社 富川村（シロ）仁安三年勅詔之年元

毎年三月三日

山主祭辰（シロ） 富川村内下（アシテ）多々年每年三月三日
幸神社 富川村多岐山（シロ）辰神（シロ）幸神（シロ）
事（シロ）志（シロ）祭（シロ）收（シロ）多岐（シロ）ノ

常信寺 富川村（シロ）は多岐（シロ）左作（シロ）多岐（シロ）
布子新迦（シロ）掌（シロ）心（シロ）化（シロ）也（シロ）春（シロ）化（シロ）也（シロ）長
天（シロ）蓮（シロ）也（シロ）度（シロ）也（シロ）大代（シロ）三和

二年（シロ）の東（シロ）西（シロ）北（シロ）南（シロ）

一
代生年 四村（シロ）行（シロ）源（シロ）小西（シロ）四村（シロ）行（シロ）源（シロ）
底十年（シロ）の東（シロ）西（シロ）北（シロ）南（シロ）

一
誓安寺 四村（シロ）行（シロ）源（シロ）山極（シロ）幸（シロ）多岐（シロ）

お代承保九年二月即ち建三月（シロ）云

東方寺

一
大寺守 二ノ寺保（シロ）富川村（シロ）行（シロ）多岐（シロ）幸（シロ）多岐

ノ（シロ）天長（シロ）多岐（シロ）行（シロ）大寺（シロ）の國事（シロ）とシロ

一
岩屋山（シロ）王寺古跡 富川村（シロ）多岐天平多岐（シロ）弘
法大师（シロ）多岐（シロ）とシロれ（シロ）の日（シロ）以降（シロ）今も

三四尋とて名定山山也。小川を
一室浦東是土俗古傳山神とば參り。小川を
ば川と詮參り甲斐ニ忍の名はば川と號せし
桶井村（甲斐郡）

輿地志畧四十八終

